

平取町アイヌ文化振興基本計画

平成 22 年 3 月

平取町

平取町アイヌ文化振興基本計画

目次

はじめに	1
1章 平取町アイヌ文化振興基本計画の背景	2
1. 背景	2
2. 平取町アイヌ文化振興基本計画の位置づけ	4
3. 平取町のアイヌ文化の特徴	5
4. 平取町のアイヌ文化振興の課題	8
2章 平取町アイヌ文化振興基本計画の目的と目指す姿	10
1. 平取町アイヌ文化振興基本計画の目的	10
2. 平取町アイヌ文化振興基本計画の基本理念	10
3. 平取町アイヌ文化振興基本計画の目指す姿	11
3章 平取町アイヌ文化振興の施策と推進体制	13
1. 事業の連携による平取町アイヌ文化振興の推進	13
2. 平取町アイヌ文化振興の7つの施策	15
3. 平取町アイヌ文化振興の推進体制	17
4章 平取町アイヌ文化振興の先行プロジェクトの試行	18
まとめとして	20
参考資料	
平取町アイヌ文化振興基本計画策定フロー	21
平取町アイヌ文化振興基本計画検討会議構成委員	22
出典資料	23

はじめに

近年、世界的に先住民族の存在を尊重する機運が高まっている中、平成 19 年 9 月に「先住民族の権利に関する宣言」が国際連合で採択されたことに続いて、平成 20 年 6 月には、「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」が衆参両院本会議において可決されたことを受けて、政府は「アイヌ政策のあり方に関する有識者懇談会」を設け、平成 21 年 7 月にその報告を得て今後のアイヌ政策に関する指針としました。

平成 22 年 1 月には、内閣官房長官を座長とする「アイヌ政策推進会議」を発足させ、政府と民族の代表及び有識者が一堂に会して政策協議の場を設けたことは、日本の歴史に残る画期的な出来事であると申し上げても過言ではないと私は認識しており、今後の国の政策の方向性を定めるという意味において、重要な動きの一つであります。

平取町においては、北海道アイヌ協会平取支部、平取アイヌ文化保存会、平取町二風谷アイヌ語教室など多くの皆様のご努力の積み重ねによって、神事・儀礼儀式・舞踊・言語などの貴重なアイヌ文化が保存継承されているほか、文化的景観の保全事業並びに平取ダム地域文化調査業務の実施に加えて、平成 20 年度からイオル（伝統的生活空間）再生事業がスタートするなど、アイヌ文化に関する各種調査・保全並びに振興対策が検討され進められてきています。

私どものふるさと平取町は、古より沙流川の畔^{ほとり}に栄えたアイヌ文化の華咲く地域であり、この文化の振興は町に強い活力を与える重要な政策です。

このような状況を背景にして、このたび町内外の有識者や北海道アイヌ協会平取支部、平取町議会などの委員の皆様のお知恵を拝借して、平取町が有意義で実り多き道を歩むための「平取町アイヌ文化振興基本計画」を策定する運びとなりました。

この基本計画を基にして、町は各種施策を推進して参りたいと考えておりますので、町内外の多くの皆様のご理解とご協力を賜りたいと強く希望する次第です。

平成 22 年 3 月

北海道平取町長 川 上 満

1 章 平取町アイヌ文化振興基本計画の背景

1 . 背景

平成 8 年 4 月、「ウタリ対策のあり方に関する有識者懇談会」がおよそ 1 年をかけ施策の基本理念や具体的施策のあり方等を取りまとめ、同懇談会報告書を提出している。

この報告書を踏まえて、平成 9 年、「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律（以下「アイヌ文化振興法」という）」が制定され、アイヌ文化振興等に関する施策が推進されてきた。

平成 19 年 9 月 13 日には「先住民族の権利に関する国際連合宣言」が国際連合総会で採択され、国際連合における先住民族に関する議論が一定の結論を見た。

さらに、平成 20 年 6 月 6 日、衆議院及び参議院において「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」が全会一致で採択された。

政府は、同決議を受け「政府としても、アイヌの人々が日本列島北部周辺、とりわけ北海道に先住し、独自の言語、宗教や文化の独自性を有する先住民族であるとの認識の下に、『先住民族の権利に関する国際連合宣言』における関連条項を参照しつつ、これまでのアイヌ政策をさらに推進し、総合的な施策の確立に取り組む」（「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」に関する内閣官房長官談話）考えを示した。

このような政府の考えを受け、平成 20 年 7 月にアイヌの人々も委員として参画した「アイヌ政策のあり方に関する有識者懇談会」が組織され、アイヌの歴史や先住民族としての意義、アイヌ政策の新たな理念及び具体的政策のあり方について総合的な検討が行われ、平成 21 年 7 月に報告書が出された。また、平成 22 年 1 月からは「アイヌ政策のあり方に関する有識者懇談会」の報告書を受け、アイヌの人々の意見等を踏まえつつ総合的かつ効果的なアイヌ政策を推進するため、アイヌの人々の参画のもとアイヌ政策推進会議が開催されている。

年・月	動 き
平成 8 年 4 月	ウタリ対策のあり方に関する有識者懇談会が報告書を提出
平成 9 年 5 月	アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律（アイヌ文化振興法）を制定
平成 19 年 9 月	先住民族の権利に関する国際連合宣言を国際連合総会が採択
平成 20 年 6 月	アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議を全会一致で採択
平成 20 年 7 月	アイヌ政策のあり方に関する有識者懇談会を組織
平成 21 年 7 月	アイヌ政策のあり方に関する有識者懇談会が報告書を提出
平成 22 年 1 月	アイヌ政策推進会議を開催

アイヌ政策のあり方に関する有識者懇談会・報告書

平取町アイヌ文化振興基本計画の策定にあたっては、前述のアイヌ文化を取り巻く状況を考慮することが必要である。

特に平成21年7月に出された「アイヌ政策のあり方に関する有識者懇談会報告書」に示されている「今後のアイヌ政策のあり方」については、充分考慮していくことが必要である。

以下、要点について記述する。

今後のアイヌ政策の基本的考え方

先住民族という認識に基づく政策展開

- ・アイヌの人々は日本列島北部周辺、とりわけ北海道の先住民族であると考えられることができる。
- ・国の近代化政策の結果、その文化に深刻な打撃を与えたという経緯を踏まえ、国には先住民族であるアイヌの文化の復興に配慮すべき強い責任がある。
- ・ここでいう文化とは、言語、音楽、舞踊、工芸等に加え、土地利用の形態等の民族固有の生活様式の総体と捉えるべき。
- ・伝統を踏まえた復興と共に、それを核として新しいアイヌ文化を創造する視点が必要。
- ・偏見や差別の解消、新しい政策の円滑な推進のために、国民の正しい理解・知識の共有が必要。次の世代が夢や誇りを持って生きられる社会にしていく心がけが大切。

国連宣言の意義等

- ・宣言は法的拘束力がないものの、先住民族に係る政策のあり方の一般的な国際指針としての意義は大きく十分尊重されるべき。
- ・参照するに当たっては、各々の国の先住民族の歴史や現状を踏まえることが必要。
- ・アイヌ政策の根拠を憲法の関連規定に求め、積極的に展開させる可能性を探ることが重要。

政策展開に当たっての基本的な理念

ア アイヌのアイデンティティの尊重

- ・アイヌとしてのアイデンティティを持って生きることを積極的に選択し、かつ、その選択に従って自律的に生を営むことを可能とする政策が必要。

イ 多様な文化と民族の共生の尊重

- ・アイヌという民族が存在していることは極めて意義深い。広義の文化の復興へ配慮することは、多様でより豊かな文化を享有できるという意味において国民一般の利益にもなる。

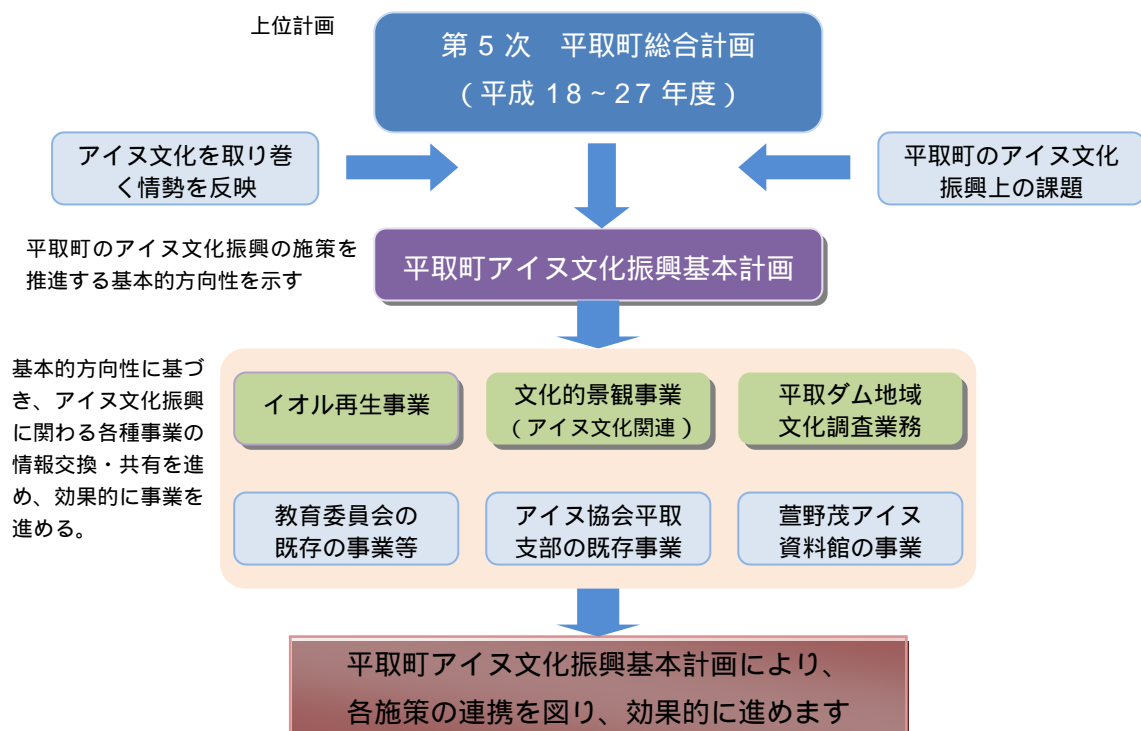
ウ 国が主体となった政策の全国の実施

- ・今後も、地方公共団体や企業などの民間による自主的な取組は重要であるが、従来以上に国が主体性を持って政策を立案し遂行すべき。地方公共団体等との連携・協働が重要。

2. 平取町アイヌ文化振興基本計画の位置づけ

- ・「平取町アイヌ文化振興基本計画」は、上位計画である「第5次平取町総合計画」に基づき、アイヌ文化を取り巻く情勢や平取町のアイヌ文化振興上の課題を踏まえて、平取町のアイヌ文化振興の各種施策の基本的方向性を示すものである。
- ・その基本的方向性に基づき、「イオル再生事業」や「文化的景観事業」、「平取ダム地域文化調査業務」の情報の交換、共有を行い効果的なアイヌ文化振興施策を推進する。
- ・また、平取町教育委員会の既存事業、北海道アイヌ協会平取支部の進める既存事業、萱野茂二風谷アイヌ資料館における事業などとの連携を促進し、効果的な施策を推進する。
- ・これらの推進をとおして他の地域に先駆けたアイヌ文化振興の先導的役割を担うことを目指す。

平取町アイヌ文化振興基本計画の位置づけ



計画の期間

- ・本計画は、10カ年（平成22年度～平成31年度）を対象とする。
- ・ただし、その間の社会、経済、政治情勢や年次計画の進行状況などに応じ、適宜見直しを行う。

3. 平取町のアイヌ文化の特徴

(1) 平取町のアイヌ文化の特徴

平取町のアイヌ文化の主な特徴として以下の5つがあげられる。

平取町のアイヌ文化の主な特徴

- アイヌ文化発祥伝説の地（オキクルミカムイ伝説）
- 沙流川に育まれたアイヌ文化の栄えている地
- SAR-UN-KUR IWOR が形成され文化的所産の数多く残る地
- アイヌ文化の歴史を感じとることのできる地
- 世界的にも知られ多くの研究者が訪れ、育った地

アイヌ文化発祥伝説の地（オキクルミカムイ伝説）

- ・アイヌ民族に生活文化を教えた神として知られる、「オキクルミカムイ」が住まわれた伝説が平取町にある。
- ・オキクルミカムイは、アイヌに雑穀栽培や狩猟、漁猟などの生活文化を教えた神として知られている。
- ・オキクルミカムイにまつわる伝承や伝説地が今でも残っている。

参考文献：「沙流川地域文化評価業務アイヌ文化環境保全対策調査総括報告書」 2006年3月・平取町
オキクルミカムイ伝説については、本計画書 P23 出典資料参照のこと

沙流川に育まれたアイヌ文化の栄えている地

- ・沙流川とその流域の豊かな自然環境は、特色のある文化形成を可能にしてきた。
- ・アイヌの人々は、動植物をはじめとする大切な生活資源と物や道具、また、それを生み出してくれる、山や川、海などの自然環境や現象をカムイ（神）とみなし、崇めてきた。
- ・平取町内の各地には、アイヌの人々のカムイノミ（神への祈り）の対象となる、チノミシリ（我ら祭るところ）があり、イヨマンテ（熊送り）が行われた記録も数多く残っている。
- ・アイヌ語でチセやコタンの周りに築いた砦柵や祭祀の場、あるいは見張り場という意味の「チャシ」が、他の地域では例を見ないほど数多く分布している。
- ・沙流川流域では、アイヌの生産活動としてソンプ（ソバ）やムンチロ（アワ）、ピヤパ（ヒエ）などの雑穀の栽培がさかんに行われていた。収穫量も多く、多くの人を養い得る安定的な食糧供給がなされていた可能性が高い。
- ・アイヌ民族の口承文芸の中で、沙流川流域を題材としているものも多くある。

参考文献：「沙流川地域文化評価業務アイヌ文化環境保全対策調査総括報告書」 2006年3月・平取町

SAR-UN-KUR IWOR が形成され文化的所産の数多く残る地

- ・かつての沙流川流域には SAR-UN-KUR IWOR が存在していたといわれている。SAR-UN-KUR IWOR には 2 つの意味があるとされており、一つは沙流川流域外との区別を示す「領域」、もう一つは SAR-UN-KUR IWOR 内をそれぞれのアイヌの「生活の場」として分割するものである。
- ・SAR-UN-KUR IWOR の内部は 17 のコタンの IWOR に分割されており、非常に細かく何種類もの段階で IWOR の形成がみられ、沙流川流域の特徴となっていた。
- ・そこに住んでいたアイヌの人々は、IWOR の中で、秩序をもって生活に必要な食材や衣料、資材等を求めて生活を営み、特色ある伝統的な文化を育んできたことが、今日の平取町のアイヌ文化のあり方に繋がっているとされている。
- ・沙流川本流筋はもちろんのこと、その支流の額平川流域や貴気別川流域に至るまで、23 のチャシ跡、103 の遺跡が発見されている。
- ・沙流川流域の場合、チャシが河口部から中流域にのみならず、上流部にまで数多く構成されている。この事実は、チャシを拠点とする集団が多数存在していたことを物語っている。
- ・このような遺跡の考古学的発掘成果は、アイヌの人々の口承文芸やアイヌ語地名と関連づけられ、今後のアイヌ文化の継承や進展に極めて重要な役割を果たすものと期待される。

参考文献：「沙流川地域文化評価業務アイヌ文化環境保全対策調査総括報告書」 2006 年 3 月・平取町
「2006 年度・2007 年度 平取町立二風谷アイヌ文化博物館年報」

アイヌ文化の歴史を感じとることのできる地

- ・平取町内の地名の多くは、アイヌ語が語源となっており、アイヌ語地名はその土地の特徴や歴史を知る重要な証、手がかりの一つである。
- ・平取町は北海道遺産登録のアイヌ語地名、文様、口承文芸を体感できる地で、その受け皿組織として認定されている。
- ・平取町は、アイヌの人々によって古くから伝えられてきた英雄叙事詩などの口承文芸に登場する川、山、地名などが随所に実在し、アイヌ文化の歴史を体感できる地である。
- ・アイヌ文化を体感、学習できる施設として、貴重なアイヌ文化を正しく受け継ぎ、未来へと伝えていくことを概念とした「平取町立二風谷アイヌ文化博物館」や、萱野茂氏が 40 年間に亘り、収集したアイヌ民具や世界の先住民族の民具や絵画を展示する「萱野茂二風谷アイヌ資料館」がある。
- ・沙流川流域や町内の遺跡から発掘された平取町のアイヌの歴史を知る重要な遺物などを展示する「沙流川歴史館」、さらに、平取町におけるアイヌ文化情報発信の拠点的な施設となる「アイヌ文化情報センター」がある。

参考文献：「沙流川地域文化評価業務アイヌ文化環境保全対策調査総括報告書」 2006 年 3 月・平取町

参考資料：平取町ホームページ <http://www2.town.biratorihokkaido.jp>

平取町立二風谷アイヌ文化博物館ホームページ

<http://www.town.biratorihokkaido.jp/biratorinibutani/>

世界的にも知られ多くの研究者が訪れ、育った地

- ・明治 11 年に日本を訪れたイギリス人女性旅行家のイザベラ・バードは、平取を訪れた最初の外国人女性である。著書である『日本奥地紀行』の中で「平取はこの地方のアイヌ部落の中で最大のものであり、非常に美しい場所であって、森や山に囲まれている。村は高い台地に立っており、非常に曲がりくねった川がその麓を流れ、これほど寂しい所はないであろう。私たちが部落の中を歩いて行くと、黄色い犬は吠え、女たちは恥ずかしそうに微笑した。男たちは上品な挨拶をした。」と平取の印象を記し、アイヌの文化や生活習慣を伝えている。

参考文献：「沙流川地域文化評価業務アイヌ文化環境保全対策調査総括報告書」 2006 年 3 月・平取町

参考資料：イザベラ・バード、高梨健吉訳『日本奥地紀行』平凡社東洋文庫 240、1973 年

- ・英国人考古学・人類学者のニール・ゴードン・マンロー博士は、アイヌ民族の研究のために昭和 6 年に二風谷に移住し、アイヌ民族の風習や語源などについて研究した。研究のかたわら、町民への無料診療を進めるなど奉仕活動に生涯を捧げた。社会事業、文化への献身的な活動は今なお慈父の如く敬仰されている。

参考文献：「平取村開村五十年史」昭和 27 年同編纂委員会

- ・イギリス人のキリスト教宣教師ジョン・バチェラーは伝道のため明治 10 年に来日し、2 年後の明治 12 年に初めて平取を訪れアイヌ語を学んだ。明治 24 年に上平取に聖公会を設け、布教活動のかたわらアイヌ文化の調査、研究に従事し、大正 12 年には平取に保育園を設けた。

参考文献：「平取町史」昭和 49 年北海道平取町

- ・言語学者・国語文学者であり、アイヌの口承文芸ユーカラの研究者である金田一京助は、明治 39 年に平取町で初めてユーカラに出会った。沙流川の川筋に住む翁^{おきな}ワカルパが大変優れた伝承者であることを知った金田一は、ワカルパを東京に招き、約 1 カ月に及び、「虎杖丸^{ツネ}の曲^{シリカ}」、「蘆丸^{シヨブネ}の曲^{シリカ}」など 14 編 2 万行の叙事詩と、その他、短い神話の詩集などを記録した。「私がアイヌの総合的知識の基礎を形づくることのできたのは、実にこの翁の誠実なる魂と邂逅^{かいにう}することのできた賜^{たまもの}であった。」と記している。金田一の記録は今日のアイヌ口承文芸の基礎となっている。

参考文献：金田一京助著・藤本英夫編『ユーカラのうびと 金田一京助の世界 1』2004 年 4 月 10 日・平凡社

- ・大正 15 年に平取町二風谷で生まれた萱野茂は、祖母の語るアイヌの昔話を聞きながらアイヌ語を母語として育った。小学校卒業後、造林、測量、炭焼き、木彫、観光などに従事するが、昭和 27 年にアイヌ民具の収集を開始。昭和 35 年頃からはアイヌ語や口承文芸の記録にも力を入れはじめ、金田一京助、知里真志保らの知遇を得たのちは、さらに収録活動に邁進した。収集した各種資料は、文化資料館・博物館設立の礎^{いしづえ}となった。また数多くの物語集、アイヌ語辞典などとしても結実した。晩年には学術博士号、名誉町民の榮譽を得た。

参考文献：萱野れい子著・須藤功編『写真で綴る萱野茂の生涯』2008 年農山漁村文化協会

4. 平取町のアイヌ文化振興の課題

平取町のアイヌ文化振興上の課題として、以下のことがあげられる。

平取町のアイヌ文化振興の課題

平取町民のアイヌ文化に対する理解を一層深めてもらうことが必要
アイヌ語地名の表記などによってアイヌ語を普及することが必要
アイヌ文化の伝承を生業に結び付けながら伝統工芸やアイヌ文様、口承文芸などの
保存と継承を推進することが必要
アイヌ文化を活かし交流を推進する新たな産業の創出が必要
地域の特徴を活かしたイオルの再生を展開することが必要

平取町民のアイヌ文化に対する理解を一層深めてもらうことが必要

- ・平取町では教育委員会の講座など様々なアイヌ文化に関する事業が行われているものの、一部の町民だけが参加し、多くの町民から理解されていない面がある。
- ・情報提供の方法が十分でなく町民にアイヌ文化に関する情報がいきわたっていない。
- ・アイヌ文化振興に関わる団体と町民の交流が十分とは言えない。
- ・平取町民のアイヌ文化に対する理解を深めてもらうには、平取町内でアイヌ文化に関する教育の推進が必要である。
- ・平取町内の学校教育の中でも、学校間で意識の差があることから、学校間の交流の機会を設けるなどして、その解消に努める必要がある。
- ・小学生の時にアイヌ文化に関しての教育を受けても中学・高校に進むと勉強する機会がなくなってしまうため継続できる取り組みが必要である。

アイヌ語地名の表記などによってアイヌ語を普及することが必要

- ・平取町は、詳細にアイヌ語地名が調査されている貴重な地域であり、こうした調査結果を広く知ってもらいアイヌ文化の理解を広めるために、アイヌ語地名の表記を推進することが大切である。
- ・アイヌ語地名には、その土地の特徴や様相を意味するものも多く、アイヌ語やアイヌ文化についての理解の促進や普及啓発をするうえで有効な手立てとなる。
- ・アイヌ語地名の中には、その場所において起きたと信じられ、語り伝えられてきた英雄伝説・地名伝説なども含まれており、それを表記することでアイヌ語の普及啓発に繋がるものと期待できる。

アイヌ文化の伝承を生業に結び付けながら伝統工芸やアイヌ文様、口承文芸などの保存と継承を推進することが必要

- ・他の地域に比べ、アイヌ文化を伝承する人は多いものの、若い世代が少ない状況にあり担い手不足の課題を抱えている。
- ・木彫りや刺繍体験、舞踊などの講座を開催すると多くの人が集まるが、継続して参加する人は少ない。
- ・数十年かけて習得する伝統工芸を、現行の職業訓練などの制度では、身に付けるのが難しい。また、技術を習得し工芸品を製作しても販売が難しいため生業に結びついていない。
- ・伝統工芸の後継者を育成するには、技術が身に付くまでの生活を保障し、さらにその伝統工芸が生業に結び付く必要がある。
- ・平取町ではアイヌ文化の伝承活動を、ほぼボランティア活動で支えているため、男性が活動しにくい。
- ・仕事がある人はアイヌ文化の伝承活動に参加できず、アイヌ文化やアイヌの知識や技術を学びたくても生活が成り立たない状況である。
- ・伝統工芸品をつくるための原材料の持続的な確保が難しい状況である。
- ・伝統工芸品を販売するためのルートや仕組みづくりが必要である。
- ・アイヌの伝統工芸やアイヌ文様が勝手に使われるのを防ぐために、商標登録や認定制度を利用することも考えられる。
- ・北海道遺産であるアイヌ文様の活用や、伝統工芸品の新たな商品開発が進んでいない状況である。

アイヌ文化を活かし交流を推進する新たな産業の創出が必要

- ・アイヌの精神文化を感じてもらえるような拠点を整備する必要がある。
- ・平取町民のアイヌ文化に対する理解を深め、平取町が一体となつての受け入れ体制をつくる必要がある。
- ・滞在型観光を推進するために滞在施設や観光施設を整備することが必要である。
- ・アイヌ文化だけでなく、農業など他の地域資源を組み入れた観光の推進も必要である。
- ・国の重要文化的景観に選定されたことを活かした観光の推進が求められている。

地域の特徴を活かしたイオルの再生を展開することが必要

- ・北海道内の他地域のイオル再生計画や構想との違いを明確にしながら事業を展開することが重要である。
- ・平取町のアイヌ文化の特徴でもある沙流川流域の豊かな自然環境を活かした事業の展開が求められている。
- ・かつてのIWORをイメージし、国有林や民間企業の持つ森林とも連携した事業の展開が必要である。
- ・文化的景観と連動し、アイヌ文化の伝承基盤としての事業展開が求められている。

2章 平取町アイヌ文化振興基本計画の目的と目指す姿

1. 平取町アイヌ文化振興基本計画の目的

平取町アイヌ文化振興基本計画の目的

アイヌの人々の誇りの継承と理解の促進

平取町は、アイヌ文化発祥伝説の地であり、オキクルミカムイは平取町のアイヌの人々にとって、象徴的なカムイとして崇め慕われてきている。

また、平取町は沙流川の豊かな自然環境によって育まれたアイヌ文化が栄えた地で、遺跡などの文化的所産が数多く残る地でもある。

一方、平取町のアイヌの人々は、中世からさらに明治以降の国の施策の中で受けた差別などにより失いつつあったアイヌ文化を護り、今なお誇りをもって受け継いできている。

しかし、平取町内でもアイヌ文化が、町民全体に十分理解されている状況になく、アイヌ文化は特別なもので自分たちの地域の大切な文化という意識は希薄である。

アイヌ文化の伝承ということでは、他の地域に比べアイヌ文化の伝承者は多いものの、高齢化が進み担い手不足などの課題を抱えている。

こうした状況から、本計画は平取町において「アイヌの人々の誇りの継承と理解の促進」を図ることを目的とする。

2. 平取町アイヌ文化振興基本計画の基本理念

平取町アイヌ文化振興基本計画の基本理念

沙流川が育むアイヌ文化のかおるまち～多様な文化が共生する地域社会の創造

「平取町アイヌ文化振興基本計画」では、平取町のアイヌ文化の特徴で記述した沙流川の豊かな自然環境により育まれたアイヌ文化を大切に継承していくことに加え、現代社会の暮らし方を尊重しつつ多様な文化が共生・共存しながら創造的で豊かな地域社会を築いていくことを基本理念とする。

3. 平取町アイヌ文化振興基本計画の目指す姿

平取町では、アイヌ文化振興を進めて、下記のようなまちを目指す。

平取町アイヌ文化振興基本計画の目指す姿

アイヌ文化を町民が理解し、親しみ、関わりを持ちながら大切にしているまちへ

アイヌ文化に関しての学校教育を積極的に進めるまちへ

アイヌ文化との関わりの中で沙流川のおりなす自然景観を保全、活用するまちへ

アイヌ文化を学び、知るための情報が蓄積され、発信されているまちへ

アイヌ文化の拠点として多くの人々が訪れるまちへ

アイヌ文化の継承環境が整い、担い手が育つまちへ

アイヌ文化の息づく地域産業が形成されるまちへ

アイヌ文化を町民が理解し、親しみ、関わりを持ちながら大切にしているまちへ

- ・平取町では、町民誰もが、アイヌ文化に関する教室や講座に参加し、アイヌ文化に何らかの関わりを持っている。
- ・オキクルミカムイ伝説のある平取町のアイヌ文化が、町民の誇りとなって語り継がれている。

アイヌ文化に関しての学校教育を積極的に進めるまちへ

- ・平取町では、子供の時から学校教育の場など様々な場面でアイヌ文化とふれる機会が設けられている。
- ・アイヌ文化について小学校、中学校、高校をとおして学習されている。

アイヌ文化との関わりの中で沙流川のおりなす自然景観を保全・活用するまちへ

- ・アイヌの人々の精神文化を理解し、沙流川流域の豊かな自然環境が大切にされている。
- ・沙流川流域のアイヌ文化の特徴である川洲畑などの原風景が息づき、そこで文化伝承に必要な食材が生産されている。
- ・アイヌの人々の自然観と調和した美しい街並みや沿道の景観がある。
- ・アイヌの人々の精神的な拠りどころとなる景観や地形を保全し、活発な伝承活動が展開されている。
- ・沙流川のおりなす豊かな自然景観の中で、伝統的な暮らしに必要な自然素材が持続して生産されている。

-
- アイヌ文化を学び、知るための情報が蓄積され、発信されているまちへ
- ・アイヌの人々を中心とした町民が調査員となり、アイヌ文化に関する調査研究が行われ、情報が蓄積されている。
 - ・調査結果が町民にも公開され、広く知られている。
 - ・調査結果をもとに、伝統的な儀礼や伝承活動が活発に展開している。
 - ・アイヌ語の地名表記が進み、アイヌ語学習の場や理解促進の場として活用されている。
 - ・平取町のアイヌ文化の情報が世界に発信され、平取町を訪れる研究者や観光客が増加し、世界的なまちになっている。

- アイヌ文化の拠点として多くの人々が訪れるまちへ
- ・アイヌ文化を知り・学ぶために国内だけでなく世界から多くの人々が訪れている。
 - ・町民が一丸となって平取町のアイヌ文化を伝えている。
 - ・訪れた人に情報が提供され、アイヌ文化を体感できる場所も随所に整備されていて、拠点となっている。
 - ・アイヌ文化を学び・知るために訪れた人々との交流によって、平取町全体が活気のあるまちになっている。

- アイヌ文化の継承環境が整い、担い手が育つまちへ
- ・イオル再生事業や文化的景観事業等によりアイヌ文化の伝承基盤が整備されている。
 - ・地域文化調査業務などに町民が関わり、平取町の伝えるべきアイヌ文化の情報の調査が進み蓄積され、連動して伝承活動が行われている。
 - ・口承文芸や舞踊などの発表の機会が多く持たれ、伝統工芸展などが町民をはじめ国内外の人々を対象に開催されるなど、担い手の育成が進んでいる。

- アイヌ文化の息づく地域産業が形成されるまちへ
- ・平取町の伝統工芸家の持つ技術と文様などのデザインを活かし、新たな産業の創出につながっている。
 - ・伝統工芸に使用する自然素材は、行政や民間企業と連携して、町内で持続して調達できるようになっている。
 - ・沙流川や、近代開拓における牧野などのおりなす文化的景観とアイヌの人々の拠りどころとなるチノミシリなどの自然景観がつながり、新たな観光素材として、また、アイヌ文化伝承の場や普及啓発の場として活用されている。
 - ・沙流川流域の豊かな森林などの自然環境が、アイヌの人々の精神文化にふれる空間として活用され、新たな文化産業が形成されている。

3章 平取町アイヌ文化振興の施策と推進体制

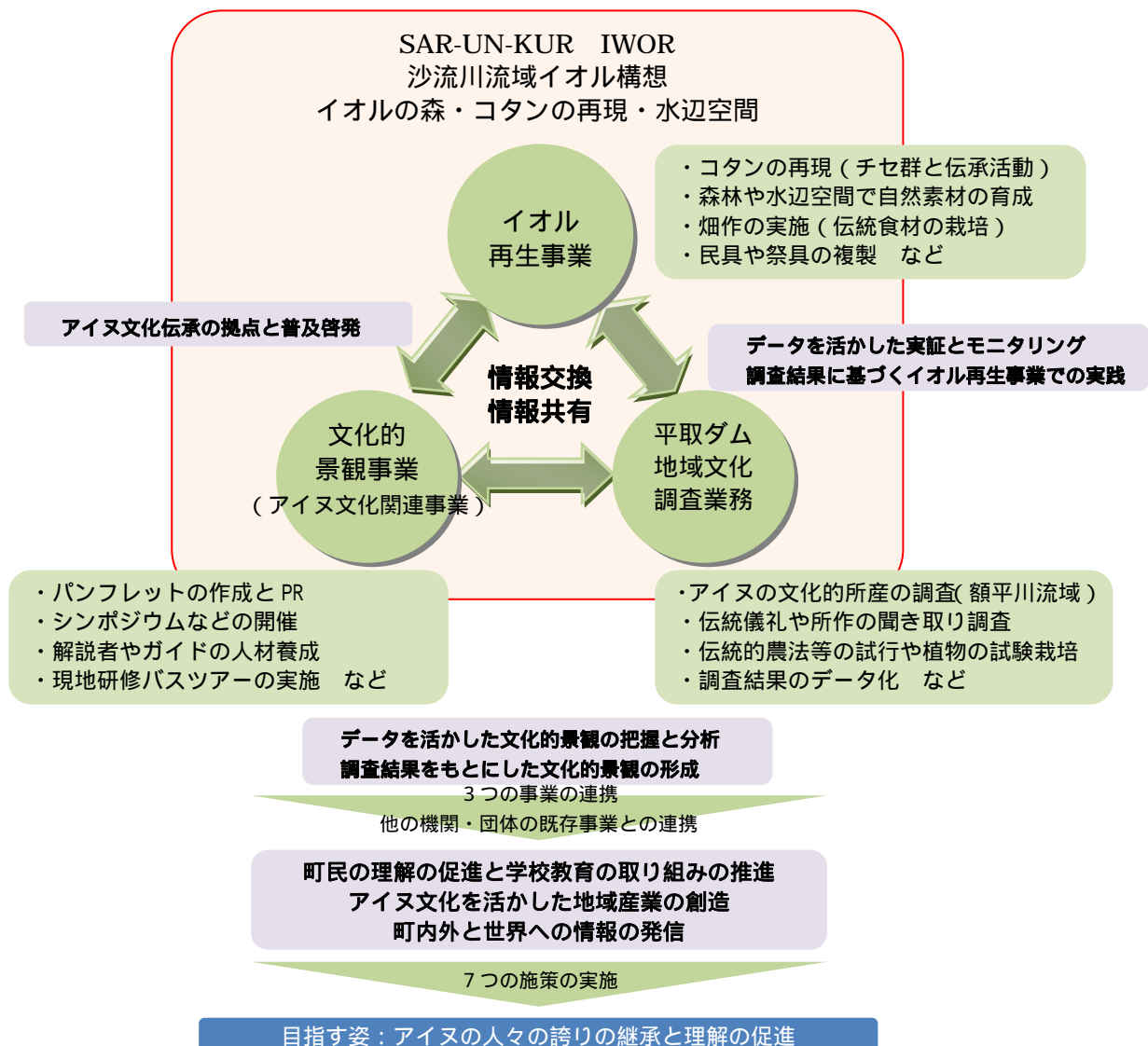
1. 事業の連携による平取町アイヌ文化振興の推進

平取町では、「沙流川流域における伝統的生活空間整備構想 / IWOR (沙流川流域イオル構想)」を策定しており、それに基づき、「コタンの再現・イオルの森・水辺空間」の地域を設定し、「イオル再生事業」を進めている。

また、平取ダムの建設予定地周辺のアイヌの文化的所産に与える影響とその保全対策について「平取ダム地域文化調査業務」を進めている。

さらに、「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」が、北海道内で初めて重要文化的景観に選定されており、その中の構成要素では、アイヌ文化が重要な位置を占めている。

そこで、平取町アイヌ文化振興にあたっては、現在進めている「イオル再生事業」、「平取ダム地域文化調査業務」、「文化的景観事業」の3つの事業で情報交換・情報共有を基本に、平取町教育委員会等の既存事業や、関係機関・団体との連携を図ることにより、効果的な施策を検討し進めることとする。



事業の連携による平取町アイヌ文化振興

「イオル再生事業」と「文化的景観事業」の連携によるアイヌ文化振興

アイヌ文化伝承の拠点と普及啓発

- ・アイヌ文化継承基盤の確立
- ・アイヌ文化普及啓発手法の構築 など

「地域文化調査業務」と「イオル再生事業」の連携によるアイヌ文化振興

データを活かした実証とモニタリング

- ・川洲畑の再現と栽培の試行
- ・植物栽培試験区のモニタリング など
- 調査結果に基づくイオル再生事業での実践
- ・川洲畑での雑穀栽培と体験交流
- ・森林や水辺空間での自然素材の育成
- ・伝統儀礼技法の伝授と担い手養成 など

「文化的景観事業」と「地域文化調査業務」の連携によるアイヌ文化振興

データを活かした文化的景観の把握と分析

- ・アイヌの人々の自然観に根ざす景観
- ・チノミシリや伝説伝承地のある景観
- ・地形などに由来するアイヌ語地名の表示
- ・生活や生業に関わりのある景観 など
- 調査結果をもとにした文化的景観の形成
- ・文化的景観を織り成す構成要素の保全
- ・文化的景観の視点場の確保と保全
- ・視点場を結ぶフットパスの設定 など

「イオル再生事業」と「地域文化調査業務」、「文化的景観事業」の3つの事業と「教育委員会の既存事業」、「アイヌ協会平取支部の既存事業」、「萱野茂アイヌ資料館の事業」等との連携

◇ 町民の理解の促進と学校教育の取り組みの推進

◇ アイヌ文化を活かした地域産業の創造

◇ 町内外と世界への情報の発信

7つの施策の実施

目指す姿の実現 : アイヌの人々の誇りの継承と理解の促進

2. 平取町アイヌ文化振興の7つの施策

平取町のアイヌ文化振興の基本理念を基に、前述した目指す姿を実現し目的を達成するため、事業の連携により以下の7つの施策を進める。

平取町アイヌ文化振興の7つの施策

アイヌ文化の普及・啓発の促進

アイヌ文化の教育の推進

アイヌ文化を育む沙流川の自然景観の保全と創出

アイヌ文化の町民と専門家の協働による調査研究

アイヌ文化の情報発信と拠点整備

アイヌ文化を担う人と組織づくり

アイヌ文化を活かした地域産業の振興

アイヌ文化の普及・啓発

- ・ 町内外でのアイヌ文化普及啓発事業の展開
- ・ 若者とのアイヌ文化交流の推進 など

アイヌ文化教育の推進

- ・ 小学校、中学校、高校を通じたアイヌ文化に関する学習の推進
- ・ アイヌ文化を体感する場の整備 など

アイヌ文化を育む沙流川の自然景観の保全と創出

- ・ 沙流川を軸とした文化的景観の形成
- ・ 素材や資源を持続して供給する生産機能の整備
- ・ 国有林や企業との連携による循環型森林環境の整備
- ・ アイヌの文化や精神を伝える景観の保全や案内表示板等の整備 など

アイヌ文化の町民と専門家の協働による調査研究

- ・ 町民と専門家との協働による調査研究の推進
- ・ 大学や世界の民族研究機関との連携
- ・ 専門家や研究者のネットワークの形成 など

アイヌ文化の情報発信と拠点整備

- ・町民に向けた情報発信
- ・アイヌ文化データベースの整備
- ・アイヌ文化を伝えるホームページの充実
- ・アイヌ文化継承の拠点空間整備
- ・アイヌ文化情報センターの活用 など

アイヌ文化を担う人と組織づくり

- ・重要無形民俗文化財の保全
- ・イオル再生事業と地域文化調査業務の連携による人材育成
- ・アイヌ文化の担い手とそれを支える地域住民による組織づくり など

アイヌ文化を活かした地域産業の振興

- ・アイヌ文化と地域資源を組み合わせた交流産業の推進
- ・自然素材の活用、スローフード的健康食品としてのアイヌの伝統的食文化を普及・啓発
- ・伝統工芸の販路拡大と商品開発
- ・平取版アイヌブランド認定制度の確立 など

3. 平取町アイヌ文化振興の推進体制

アイヌ文化振興基本計画は、平取町におけるアイヌ文化の関係者のほかに学識者や専門家、町民なども加えて進めることが求められる。

そこで、「沙流川流域イオル構想平取町推進協議会」を発展させ学識者、平取町（アイヌ施策推進課、まちづくり課、教育委員会など）に、関係機関を加えた「平取町アイヌ文化振興推進協議会（以下、推進協議会）」を組織する。

推進協議会は、必要に応じてメンバーを募り検討会を設けて平取町アイヌ文化振興のための具体的検討やプロジェクトを進めることとする。

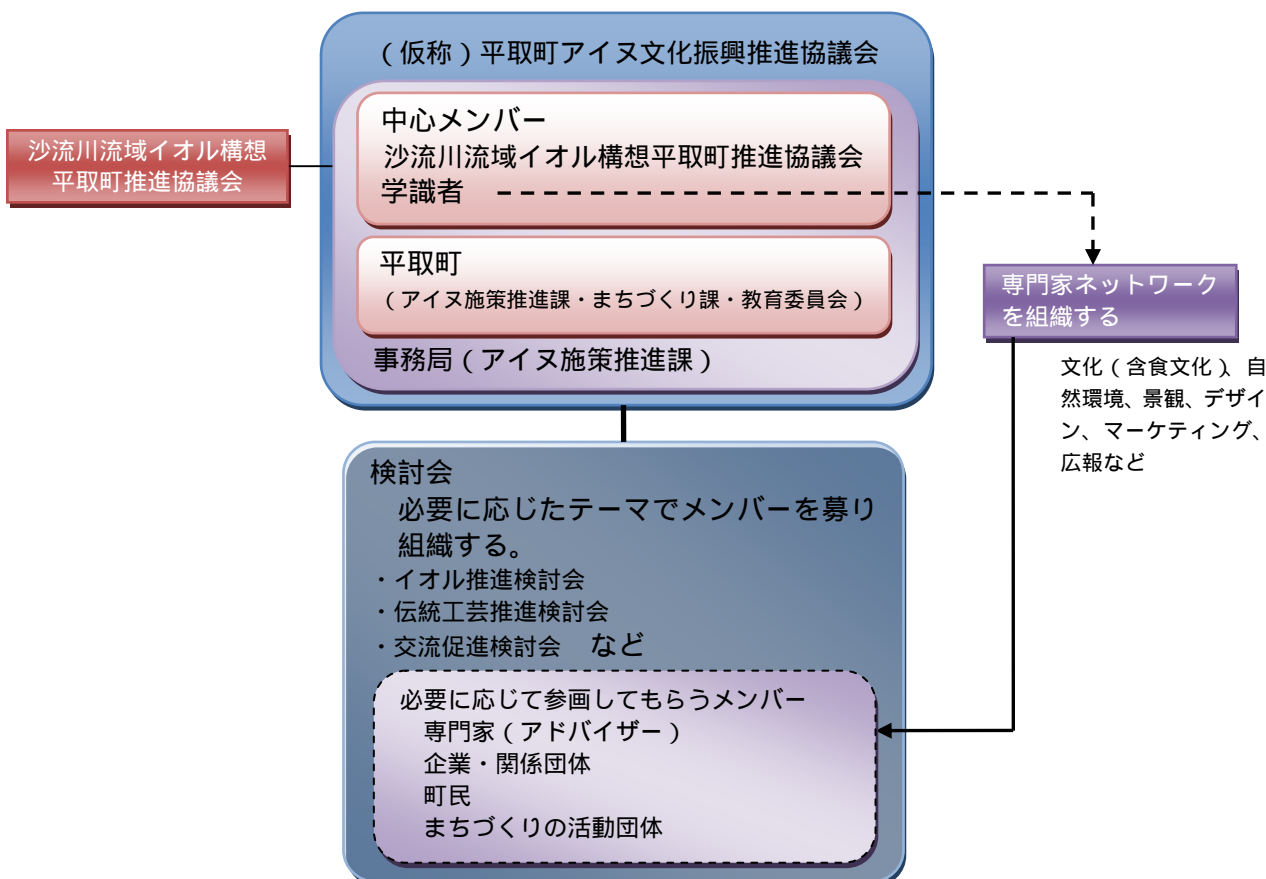
検討会は、必要に応じてアドバイザーや企業・関係団体、町民、まちづくり団体などを加えることができる柔軟性のある組織とする。

今後、推進協議会を中心に平取町でのアイヌ文化振興を進めるために、外部の専門家ネットワークも組織化していくこととする。

平取町アイヌ文化振興推進協議会の役割

- ・ 平取町アイヌ文化振興のための3つの事業の連携促進
- ・ 平取町アイヌ文化振興に関するプロジェクトの検討
- ・ 平取町アイヌ文化振興計画の検証（推進状況、計画の見直しなど）

平取町アイヌ文化振興推進協議会の組織



4章 平取町アイヌ文化振興の先行プロジェクトの試行

平取町アイヌ文化振興を推進するために、アイヌ文化を生業につなげるための、先行的なプロジェクト（計画）を試行する。

先行プロジェクトとして、次の3つを想定する。

平取町アイヌ文化振興の先行プロジェクト

平取町アイヌ伝統工芸の振興とアイヌの伝統的食文化の活用

アイヌ文化の見学や体験を取り入れた交流産業の推進

精神文化の拠りどころとなる自然環境の保全と継承対策の推進

平取町アイヌ伝統工芸の振興とアイヌの伝統的食文化の活用

アイヌ文化による伝統的産業の販路拡大とアイヌの伝統的食文化の活用

- ・平取町のアイヌ伝統工芸品やアイヌの伝統的食文化の活用についてのマーケティング（市場）調査などを行い、販売ルートの拡大と食文化普及啓発の促進を図る。

商標登録や認定制度の検討

- ・平取町のアイヌ文様は他の地域で見られない独自の文様であることから、平取アイヌ伝統工芸の商標登録や伝統工芸品として登録、平取版アイヌブランド認定制度を検討し、アイヌ文様の保存と地域ブランド化を進める。

平取町アイヌ伝統工芸の技術とデザインを活用した新たな商品の開発

- ・平取町の伝統工芸家の技術とデザインを活かした新たな商品（家具や雑貨、衣服等）の製品を開発し販売する。
- ・新たなアイヌの商品は、外部のデザイナーなど専門家も交えて開発を進め、マーケットを広げるようにする。

アイヌ文化の見学や体験を取り入れた交流産業の推進

平取町のアイヌ文化と他の地域資源を組み合わせながら、平取町の交流産業を推進する。

- ・町立二風谷アイヌ文化博物館等の見学、文化的景観やアイヌ語地名めぐり、アイヌ文化の体験、などの組み合わせに、アイヌの伝統的食文化や平取町の特産品であるトマトやびらとり和牛などの「食」を織り込んだモデルコースを設定する。
- ・モデルコースでは、平取町のアイヌの人々や地域文化調査業務に携わっている調査員、アイヌ文化や郷土に関心の高い町民がガイドするしくみをつくり、アイヌ文化を正しく知ってもらうことを大切にしながら、就労の場を創出する。
- ・また、都市住民や学生、研究者などの来訪をコーディネート（調整）できるプランナー（企画立案者）も養成する。

精神文化の拠りどころとなる自然環境の保全と継承対策の推進

- ・平取町のアイヌ文化の特徴である精神文化の基盤としての山や川などの自然を保全する。
- ・高齢化しつつある口承文芸や儀礼の伝承者から、広く意欲をもった若年層への伝承を推進し、継承者の養成を図る。
- ・これまで実施されてきた関連事業・活動との効果的な連携、支援強化を進める。
- ・言語学や教育学等の専門家との協力により、次世代継承者の系統的な育成システムの構築に向けた作業に着手する。

まとめとして

平取町アイヌ文化振興基本計画検討会議において、ここに提出するアイヌ文化基本計画をまとめた。この計画は、1. 平取町アイヌ文化振興計画の背景、2. その目的と目指す姿、3. 施策と推進体制、4. アイヌ文化振興の先行プロジェクト試行の4章からなる。

第1章の背景においては平成8年のウタリ対策のあり方に関する有識者懇談会報告書の提出から始まり、平成22年1月のアイヌ政策推進会議に至る経過が、そしてアイヌ政策のあり方に関する有識者懇談会・報告書における政策展開、ここに至る間に出された国連宣言の意義、そしてアイヌ政策の展開に当たっての基本理念が挙げられた。

基本計画の位置付けでは、イオル再生事業、文化的景観事業、平取ダム地域文化調査業務、二風谷アイヌ文化博物館を中心とする平取町教育委員会や、北海道アイヌ協会平取支部の既存事業、萱野茂二風谷アイヌ資料館の各事業などの情報交換、共有において事業を効果的に進めることが、また、平取町のアイヌ文化の特徴、そしてアイヌ文化振興の課題が整理された。

第2章の目的と目指す姿については、目的としてはアイヌ民族の誇りの継承と理解の促進が挙げられ、基本理念としてはまず、沙流川が地域の中軸をなすことと、それが平取町のアイヌ文化を育んできたことを認識しつつ、多様な文化が共生する地域社会を創造しようとする事が述べられ、目指す姿として7つの目標が掲げられた。

第3章としては、これらを実現するためのアイヌ文化振興の施策と推進体制として、イオル再生・文化的景観・地域文化調査3事業が連携して、アイヌ文化振興施策が進められるべきであることとして、そのための施策の具体例が提示され、また、その推進体制として新たな平取町アイヌ文化振興推進協議会の組織づくりと、それを支援する専門家のネットワークの組織化が提案されている。

第4章は、平取町アイヌ文化振興の先行プロジェクトの試行で、ここまでに挙げられた施策の試行が必要であること、差し当たってはアイヌ伝統工芸の振興や食文化の活用、アイヌ文化の見学や体験を取り入れた交流産業の推進につながる新たなツーリズム、精神文化の拠りどころとなる自然環境の保全と継承対策の推進の3つを挙げている。一つ目に関しては外部のデザイナーなど専門家も交えての開発、マーケットリサーチも必要であろう。二つ目についても同様にツーリズムのプロフェッショナル、あるいはより広く、民族学、民俗学から食文化に至るまで視野を広げることが考えられよう。三つ目については、多様な人々の参画が必要であろう。

まだまだ検討し、付加すべき課題も少なくない。多くの知恵を集めつつ、この計画を進めたい。

平成22年3月

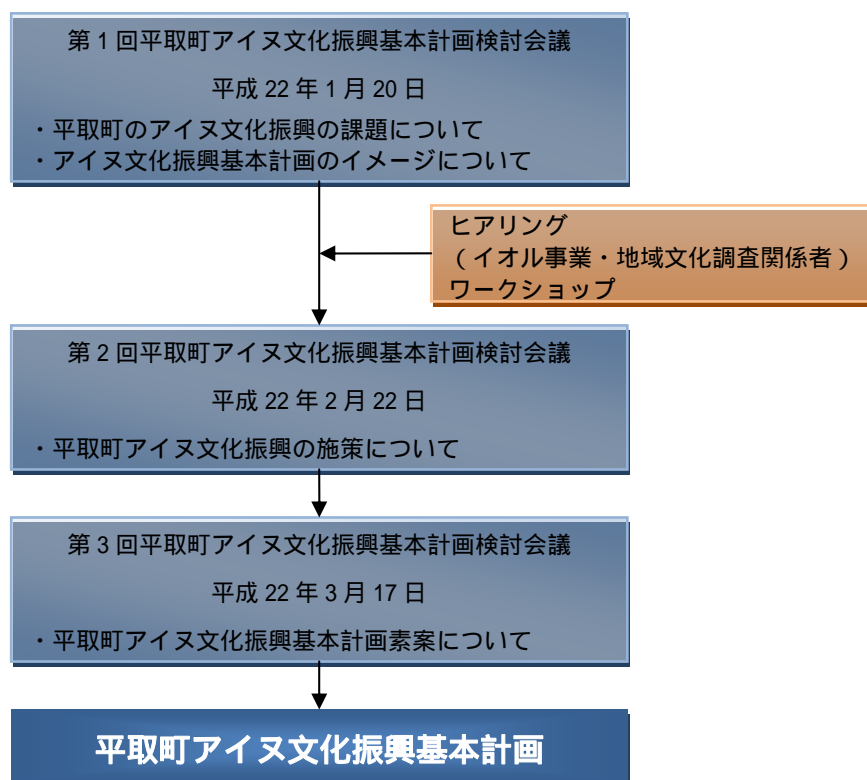
平取町アイヌ文化振興基本計画検討会議 座長 辻井達一

平取町アイヌ文化振興基本計画策定フロー

平取町アイヌ文化振興基本計画は、平取町アイヌ文化に関わる団体や学識者、行政から成る検討会議を組織して策定した。検討会議は下図の通り、3回開催した。

第1回検討会議と第2回検討会議の間には、イオル再生事業や地域文化調査業務に関わる町民から意見を聞いた。

さらに、アイヌ文化活動の実践者やまちづくり活動を行う団体が参加したワークショップを開催し、意見やアイデアを聞いた。



平取町アイヌ文化振興基本計画検討会議構成委員

委員長：辻井達一 副委員長：山田喜代太

氏名	所属
泉澤敏裕	平取町副町長
貝澤耕一	北海道アイヌ協会平取支部副支部長 / 平取アイヌ文化保存会事務局長
川上満	平取町長
川奈野惣七	北海道アイヌ協会平取支部支部長 / 平取アイヌ文化保存会副会長 / 二風谷アイヌ語教室副運営委員長
木村英彦	北海道アイヌ協会平取支部副支部長
斉藤憲章	平取町教育委員会教育長
篠原修	政策研究大学院大学教授（東京大学名誉教授） / 平取町文化的景観保全委員会委員長
鈴木修二	平取町議会アイヌ文化伝承推進特別委員会委員長
千葉良則	平取町議会総務文教常任委員会委員長 / 平取町文化的景観保全委員会委員
辻井達一	北海道環境財団理事長
常本照樹	北海道大学大学院教授 / 法学研究科長・法学部長 / アイヌ・先住民研究センター長
鍋沢保	北海道アイヌ協会平取支部副支部長 / 平取アイヌ文化保存会会長 / 二風谷アイヌ語教室副運営委員長
西島達夫	北海道アイヌ協会平取支部副支部長
藤沢佳宏	平取町議会議長
山田喜代太	平取町景観審議会会長

敬称略、五十音順

出典資料

出典・由来 【宇田川洋 1981年アイヌ伝承と砦 P.91-92】

沙流川の文化神オキクルミというのは本当の名であるが、アイオイナカムイ(我等が伝承する神)ともアイヌラックル(人臭い神)ともいう。オキクルミの時代は平取のところまで海が入り込んでいて、ハヨピラのところにオキクルミの漁小舎があり、本当の砦はシケレベ部落(現在の荷負)の対岸の三つの岩山の真ん中であって、老人たちがよくそこへ行っていたが、或るときずるい女が老人のあとについていったので、オキクルミが怒ってその女を散々にいためつけ、オキクルミにわびた。昔はあそこに舟の形も倉もあり、あたりは毛氈を敷いたような水汲場もあった。オキクルミが人間の生活を色々教えたが、沙流川を中心にして新冠までの者により教えず、後は家来にまかせたり、石狩川は兄のサマユンクルにまかせたのだそうだ。(門別富川・鍋沢モトアンレク氏伝)(初出更科源蔵『アイヌ伝説集』昭46)解説この伝承からは、アシリピラチャシを指すとも考えられる。前のハヨピラのチャシ(2)の伝承の萱野氏のものでは、ウコレイチャシ(シケレベチャシ)を指すらしい。

出典・由来 【荷負自治会 1988年郷土史においーダムに沈む沙流川のほとりにて-P. 15-16】

つい最近まで、アイヌ達はそのチャシの場所をオキクルミカムイの聖地として崇め、人がいてはいけない、と言われておりました。荷負本村や貫気別の人たちが、通り道であるそのオキクルミカムイのチャシの近くを通るときは、頭につけているかぶり物など取りはずし通行した、と伝えられております。

出典・由来 【宇田川洋 1981年アイヌ伝承と砦 P. 88-91】

沙流川はまた、オキクルミ・カムイ(オキクルミの神)の住まわれた伝承の地なんだ。オキクルミカムイというのは、アイヌに家の建て方や、魚の捕り方、ひえなどの農耕の仕方、それからイナウという神様に捧げる御幣のようなものなどあらゆる生活文化を教えたといわれている神様で、そのオキクルミ・カムイが住まわれた沙流川はいわばアイヌ文化の発祥地というわけだ。

おれの住んでいる二風谷からずっと下流の、平取町の市街地のはずれに、ハヨピラという沙流川を見下ろす丘があって、そこにオキクルミ・カムイが住んでいたといわれている。現在はそのハヨピラに、アイヌの伝承とは全然関係のないきらびやかな建造物が建っているが、オキクルミ・カムイのほんとうの伝説の地はあそこじゃないんだ。ほんとうは、二風谷の上流のニオイ(荷負)の市街地からさらに千メートルほど遡ったところにあるシケレベというコタンの真向いのところなんだ。そこには、それらしい建物も碑も立っていないがね。

オキクルミ・カムイが住んだ土地だということを、沙流川のアイヌはとても誇りに思っていた。たとえば沙流川のアイヌが、胆振や十勝のアイヌのところへ行ったら挨拶する場合、まず、「わたしは、オキクルミ・カムイという天国から降りて来てわたしたちに生活文化を教えてくれた神の村、その村に住まいし生活している何の誰それというアイヌ、それがわたしです。」というふうに名乗るんだ。すると相手は、一步退って、「ああ、オキクルミ・カムイの住んでおられた村からおいでになった誰それ様か」というふうに非常にいねいに迎えたもんだった。

(初出 萱野茂「わが沙流川」「シシリムカのほとり」昭48) (再録 河野本道「宗教 アイヌ始祖 オキクルミ」の伝説 「平取町史」昭49)